

秋期福音特別集会 (1) (京都)

本願回帰

――イザヤ書第28～30章、36～39章――

1983年11月5日

小池辰雄

イザヤ書からの讃美歌 エルサレムの包囲 ヒゼキヤの祈り わが中保となりたまえ とつとき隅石 回帰信仰 禍害なるかな 終末の救いの音信 信ぜずば立つことを得じ 絶対恩寵の一如の現実 俟ち望むものは福いなり 右にゆくも左にゆくも 至道無難禪師

【イザヤ28】

……¹⁴なんじら此エルサレムにある民をおさむるところの^{あなだるもの}輕慢者よ、エホバの言をきけ。¹⁵なんじらは云えり、我ら死と契約をたて陰府とちぎりをむすべり。^{みなぎ}漲りあふるる禍害の^{わざわい}すぐるときわれらに來らじ。そはわれら^{いつわり}虚偽をもて^{あやむき}避所となし欺詐をもて身をかくしたればなりと。¹⁶このゆえに神エホバか^{もとい}くいい給う、視よわれシオンに一つの石をすえてその^{よりたの}基となせり。これは^{こころ}試みをへたる石とうとき隅石かたくすえたる石なり。これに^{ひよう}依頼むものはあわつることなし。¹⁷われ公平を^{はかりなわ}準繩とし正義を^{おもし}錘とす。斯て^{ひよう}雹はいつわりにてつくれる^{あやむき}避所をのぞきさり、水はその^{かく}匿れたるところに漲りあふれん。……²⁰その^{あやむき}状は床みじかくして身をのぶることあたわず。^{あやむき}衾せまくして身をおおうこと能わざるが如し。²¹そはエホバ^{むかし}往昔ペラヂムの山にて^た起ちたまいしがごとくにたち、ギベオンの谷にて^{いざいおり}忿恚をはなちたまいしが如くにいきどおり、而してその^{おこない}所為をおこない給わん。奇しき^{くす}所為なり。その^{わぎ}工を成したまわん。異なる工なり。……²⁹此もまた万軍のエホバよりいづ。その^{はかりごと}謀略はくすしくその智慧はすぐれたり。

【イザヤ29】

¹ああアリエルよアリエルよ、ああ^{まち}ダビデの營をかまえたる^{まち}邑よ、……⁶万軍のエホバはいかつち、地震、おおごえ、^{はやち}暴風、つむじかぜ及びやきつくす火の^{ほのお}焰をもて臨みたもうべし。……

⁹なんじらためらえ而しておどろかん。なんじら^{ほしいま}放肆にせよ而して目くらまん。かれらは酔えりされど酒のゆえにあらず。かれらはよろめけりされど濃酒のゆえにあらず。¹⁰そはエホバ^{うめい}酣睡の^{かお}靈をなんじらの上にそそぎ、而してなんじらの目とじ、なんじらの^{かお}面をおおいたまえり。その目は預言者そ



のかおは先知者なり。¹¹ かかるが故にすべての黙示はなんじらには封じたる書のことばのごとなり。文字しれる人にわたして請うこれを読めといわんに、答えて封じたるがゆえによむこと能わずといわん。¹² また文字しらぬ人にわたして請うこれをよめといわんに、こたえて文字しらざるなりといわん。¹³ 主いい給わく、この民は口をもて我にちかづき口唇をもてわれを敬えども、その心はわれに遠ざかれり。そのわれを畏みおそるるは人の誠命によりておしえられしのみ。¹⁴ この故にわれこの民のなかにて再びくすしき事をこなわん。そのわざは奇しくしていとあやし。かれらの中なる智者のちえはうせ聰明者のさときはかくれん。

¹⁵ 己がはかりごとをエホバに深くかくさんとする者はわざわいなるかな。暗中にありて事をおこないていう、誰かわれを見んや、たれか我をしらんやと。¹⁶ なんじらは曲れり。いかで陶工をみて土塊のごとくおもう可んや。造られし者おのれを作れるものをさして我をつくれるにあらずというをえんや。形づくられたる器はかたちづくりし者をさして智慧なしというを得んや。

¹⁷ 暫くしてレバノンのはかわりて良田となり、良田は林のごとく見ゆるとききたるならずや。¹⁸ その日聾者はこの書のことばをきき、盲者の目はくらきより闇よりみることを得べし。¹⁹ 謙だるものはエホバによりてその歡喜をまし、人のなかの貧しきものはイスラエルの聖者によりて快樂をうべし。²⁰ 暴るものはたえ、侮慢者はうせ、邪曲の機をうかがう者はことごとく断滅さるべければなり。²¹ かれらは訟をきく時まげて人をつみし、邑門にていさむるものを謀略におとしいれ、虚しき語をかまえて義人をしりぞく。

²² この故にむかしアブラハムを贖いたまいしエホバはヤコブの家につきて如此いいたもう。ヤコブは今より恥をかうむらず、その面はいまより色をうしなわず。²³ かれの子孫はその中にわがおこなう手のわざをみん。その時わが名を聖としヤコブの聖者を聖としてイスラエルの神をおそるべし。²⁴ 心あやまれるものも知識をえ、つぶやけるものも教誨をまなばん。

【イザヤ 30】

¹ エホバのたまわく、悖れる子輩はわざわいなるかな。……⁹ これは悖れる民いつわりをいう子輩、エホバの律法をきくことをせざる子輩なり。……¹⁴ 主これを破りあだかも陶工の瓶をくだきやぶるがごとくして惜しみたまわず、その碎けのなかに爐より火をとり池より水をくむほどの一片だに見出すことなからん。

¹⁵ 主エホバ、イスラエルの聖者かくいたまえり。なんじら立ちかえりて静かにせば救いをえ、平穩にして依り頼まば力をうべしと。然どなんじらこ



の事をこのまざりき。¹⁶ なんじら^{かえり}反ていえり、否われら馬にのりて逃げ走らんと。この故になんじら逃げ走らん。又いえり、われら^{はや}疾きものに乘らんと。この故になんじらを追うもの疾かるべし。¹⁷ ひとり叱咤^{しった}すれば千人にげはしり、五人しつたすればなんじら逃げ走りて、その遺るものは僅^{わず}かに山嶺^{やまのいただき}にある杆^{さお}のごとく、岡のうえにある旗のごとくならん。

¹⁸ エホバこれにより俟^まちてのち恩恵を汝等にほどこし、これにより上^{あが}りてのちなんじらを憐れみたまわん。エホバは公平の神にましませり。凡てこれを俟ち望むものは福^{さいわ}いなり。¹⁹ シオンにおりエルサレムにおる民よ、なんじは再びなくことあらじ。そのよばわる声に応じて必ずなんじに恵みをほどこしたまわん。主ききたもうとき直にこたえたもうべし。²⁰ 主はなんじらになやみの糧^{かて}とくるしみの水とをあたえ給わん。なんじを教うるもの再びかくれじ。汝の目はその教うるものを恒^{つね}にみるべし。²¹ なんじ右にゆくも左にゆくもその耳にこれは道なりこれを歩むべしと後^{うしろ}辺にてかたるをきかん。……

【イザヤ 36】

¹ ヒゼキヤ王の十四年にアツスリヤの王セナケリブ上りきたりてユダのもろもろの堅固^{まち}なる邑^{まち}をせめとれり。² アツスリヤ王ラキシよりラブシヤケをエルサレムに遣わし大軍をひきいてヒゼキヤ王のもとに往かしむ。ラブシヤ^{ぬのさらし}ケ漂^{かたえ}工^いの野のおおぢの傍^{かたえ}なる上の池の樋^ひにそいてたり。³ この時ヒゼキヤの子なる家司^{いえつかさ}エリアキム、書記セブナ、アサフの子なる史官ヨア出てこれを迎う。

⁴ ラブシヤケかれらにいいけるは、なんじら今ヒゼキヤにいえ。大王アツスリヤの王かくいえり、なんじの恃^{たのみ}とするその恃むところは何なるか。……⁶ 視よなんじエジプトに依り頼めり。これ傷^{いた}める葦の杖によりたのめるがごとし。もし人これに倚^よりもたれなばその手をつきさされん。エジプト王パロがすべて己によりたのむものに対するは斯のごとし。⁷ 汝われらはわれらの神エホバに依頼めりと我にいわんか。そは曩^{さき}にヒゼキヤが高きところと祭壇とをみな取り去りてユダとエルサレムとにむかい汝等ここなる一つの祭壇のまえにて拝すべしといえる夫^{それ}ならずや。⁸ いま請^こうわが君アツスリヤ王に賭^{かけ}をせよ。われ汝に二千の馬を与うべければ汝よりこれに乗るものをいだせ。果して出しうべしや。……¹⁶ ヒゼキヤに聴き従うなかれ。アツスリヤ王かくのたまえり、なんじらわれと親和^{よしみ}をなし、出できたりて我にくだれ。おのおのその葡萄とその無花果とをくらい、おのおのその井の水をのむことを得べし。……¹⁸ おそらくはヒゼキヤなんじらに説きてエホバわれらを救うべしといわん。然どももろもろの国^{かみたち}の神等のなかにその国をアツスリヤ王の手より



救える者ありしや。……²⁰これらの国のもろもろの神のなかに誰かその国をわが手よりすくいだしし者ありや。さればエホバも何^{いか}でわが手よりエルサレムを救いだし得んと。……

【イザヤ37】

¹ヒゼキヤ王これをききてその衣をさき^{あらたえ}麤衣をまといてエホバの家にゆき、²家司エリアキム書記セブナおよび祭司のなかの長老等^{としよりたち}をして皆あらたえをま^とわせてアモツの子預言者イザヤのもとにゆかしむ。³かれらイザヤにいけるは、ヒゼキヤ如此^{かく}いえり。今日は患難^{なやみ}と責^{せめ}と辱^はかしめの日なり。そは子うまれんとして之をうみいだすの力なし。⁴なんじの神エホバあるいはラブシヤケがもろもろの言をききたまわん。彼はその君アッスリヤ王につかわされて活ける神をそしれり。なんじの神エホバその言をききて或はせめたもうならん。されば請うなんじこの遣れるもののために祈^{いのり}禱^はをささげよと。……⁶イザヤかれらに言いけるは、なんじらの君につげよ。エホバ斯^{かく}いたまえり曰く、アッスリヤ王のしもべら我をのしりけがせり。なんじらその聞きしことばによりて懼^{おそ}るるなかれ。⁷視^みよわれかれが意^{こころ}をうごかすべければ、一つの風声^{うわさ}をききておのが国にかえらん。かれをその国にて剣にたおれしむべし。……⁹このときエテオピアの王テルハカの事についてきけり云く、かれいでて汝とたたかうべしと。このことをききて使者をヒゼキヤに遣^はしていう。¹⁰なんじらユダの王ヒゼキヤにつげて如此^{かく}いえ、なんじが頼める神なんじを欺^{あやむ}きてエルサレムはアッスリヤ王の手にわたされじというを聴くことなかれ。……

¹⁴ヒゼキヤつかいの手より書をうけて之を読めり。しかしてヒゼキヤ、エホバの宮にのぼりゆきエホバの^{みまえ}前にこのふみを展^のぶ。¹⁵ヒゼキヤ、エホバに祈りていいけるは、¹⁶ケルビムの上に坐したもう万軍のエホバ、イスラエルの神よただ汝のみ地のうえなるよろずの国の神なり。なんじは天地^{あめつち}をつくりたまえり。¹⁷エホバよ耳をかたむけて聴きたまえ。エホバよ目をひらきて視たまえ。セナケリブ^{つかい}使者^{つかい}して活ける神をそしらしめし言をことごとくききたまえ。¹⁸エホバよ実にアッスリヤの王等^{くにとびと}はもろもろの国民とその地とをあらしめ、¹⁹かれらの神たちを火になげいれたり。これらのものは神にあらず。人の手の工^{わざ}にして、あるいは木あるいは石なり。斯るがゆえに滅ぼされたり。²⁰さればわれらの神エホバよ、今われらをアッスリヤ王の手より救いだし、て、地のもろもろの国にただ汝のみエホバなることを知らしめたまえ。

²¹ここにアモツの子イザヤ人をつかわしてヒゼキヤにいわせけるは、イスラエルの神エホバかくいいたもう。汝はアッスリヤ王セナケリブのことに



きて我にいのれり。²² エホバが彼のことにつきて語り給えるみことばは是なり。いわくシオンの^{おとめ}処女はなんじを侮りなんじをあざけり、エルサレムの^{おみなご}女子はなんじの^{うしろ}背後より^{こうべ}頭をふれり。²³ 汝がそしりかつ^{ののし}罵れるものは誰ぞ。なんじが声をあげ目をたくく向けてさからいたるものはたれぞ。イスラエルの聖者ならずや。……

³⁰ ヒゼキヤよ我がなんじにたもう徴はこれなり。なんじら今年は落穂より生^はえたるものを^{くら}食い、^{つぎのとし}明年は^{ひつち}糞生より出たるものを食わん。三年にあたりては種^まくことをなし^か收ることをなし、葡萄^{ぶどう}ぞのを作りてその果を食うべし。³¹ ユダの家ののがれて遣れる者はふたたび下は根をはり上は果を結ぶべし。³² そは遣るものはエルサレムよりいで^{のが}脱るものはシオンの山よりいづるなり。万軍のエホバの熱心これを成したもうべし。……³⁵ 我おのれの故によりて僕^{のたまえ}ダビデの故によりて、この城をまもり、この城をすくわん。これエホバ宣^{のたまえ}給るなり。

³⁶ エホバの使者いできたりアツスリヤの陣營のなかにて十八万五千人をうちころせり。^{あさつと}早晨におきいでて見ればみな死にてかばねとなれり。……

【イザヤ38】

……¹⁴ われは^{つばい}燕のごとく^{つばい}鶴のごとくに哀みなき鳩のごとくにうめき、わが眼はうえを視ておとろう。エホバよわれは迫りくるしめらる。願くはわが^{なかだち}中保となりたまえ。……¹⁷ 視よわれに甚しき^{くるしみ}艱苦をあたえたまえるは我に平安をえしめんがためなり。汝わがたましひを愛して滅亡^{ほろび}の穴をまぬかれしめ給えり。そはわが罪をことごとく^{うしろ}背後にすてたまえり。¹⁸ 陰府^{よみ}はなんじに感謝せず、死はなんじを讃美せず、墓にくだる者はなんじの誠実^{まこと}をのぞまず、¹⁹ 唯いけるもののみ活けるものこそ汝に感謝するなれ。わが今日感謝するが如し。父はなんじの誠実をその子にしらしめん。²⁰ エホバ我を救いたまわん。われら世にあらんかぎりエホバのいえにて琴をひきわが歌をうたわん。……

【イザヤ39】

……⁵ イザヤ、ヒゼキヤにいう。なんじ万軍のエホバの言をきけ。⁶ みよ日きたらん。なんじの家のものなんじの^{おやたち}列祖が今日まで^{たくわ}蓄えたるものは皆バビロンにたずさえゆかれて遣るもの一もなかるべし。是はエホバのみことばなり。……

●イザヤ書からの讃美歌

私は、イザヤ書から召団讃美歌の61番、58番、55番、56番、43番を作詞した。こんなことはおそらく世界中にないと思います。61番 (A30 「いと聖なる」) はイザヤ書の1章から33



章と、36章から39章がその内容になっています。58番(A31「曠野の如し」)は34章と35章。55番(A32「イスラエル・ユダの」)は40章から48章。56番(A33「主なるキリストは」)は49章から55章。43番(A34「み霊の主イエスに」)は56章から66章です。大体、その内容を頭において作ったわけです。これが五重奏ですね、クインテットといいます。

今日は第一回の「本願回帰」です。本願へ回帰すること。28章から30章と、36章から39章の二通りあります。36章から39章は歴史なので、その歴史の背景のもとにこの預言がなされている。もちろん、この歴史的背景は今回の預言の全部にかかわっています。それは詳しく申し上げることもなからうと思えますけれども、あらましをやりたいと思います。

●エルサレムの包囲

では、36章のところから始めます。イザヤがこの預言に立ったのは、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤという、南ユダの王国の4人の王様の時代にわたっているわけです。イザヤの預言は紀元前740年から696年まで、40年間あまり預言者として立った、非常に珍しい最大の預言者です。

イザヤ書7章あたりのところに、アッシリヤの北の方のシリヤと――シリア王のレジン――それから、レマリアの子ペカと――即ちペカというのはイスラエルの連合軍です――シリアとイスラエルと――今もやはりやってますね、この近東でいろんなことを。昔から絶えないわけです――その連合軍が南ユダに攻め入ってくるというときに、ユダの王アハズ、735年から715年ですが、これがアッシリヤに、テフラテレゼルというアッシリヤの王さまに援軍を求めたわけです。そこで、アッシリヤは強いですから、このシリアのダマスコが陥落した。紀元前721年あるいは722年といわれています。そういうことがあつたわけです。今回ののはそれから少しあとになります。

ヒゼキヤは紀元前721年から693年――学者によつていろいろ数が違うんですが――「ヒゼキヤ王の十四年」というのは有名な721年です。これはセンナケリブがエルサレムを包囲したときです。

1 ヒゼキヤ王の十四年にアッスリヤの王セナケリブ上りきたりてユダのもろもろの堅固なる邑^{まち}をせめとれり。2 アッスリヤ王ラキシよりラブシヤケをエルサレムに遣わし大軍をひきいてヒゼキヤ王のもとに往かしむ。ラブシヤ^{ぬのさらし}ケ漂工^めの野のおおちの傍^{かたえ}なる上の池の樋^ひにそいてたてり。3 この時ヒゼキヤの子なる家司^{いえつかさ}エリアキム、書記セブナ、アサフの子なる史官ヨア出てこれを迎う。

もう14年にアッシリヤのセンナケリブがやってきて、ユダの諸々の堅固な邑を攻めとつた。「ラブシヤケ」は人名ではなく職名です。これをエルサレムのヒゼキヤ王のもとに遣わして、次のようなことを言わせたということが書いてあります。アッシリヤの王様の私信を伝え



るわけです。

4 ラブシヤケかれらにいいけるは、なんじら今ヒゼキヤにいえ。大王アツスリヤの王かくいえり、なんじの侍たのみとするその侍むところは何なるか。

結局今度は、ヒゼキヤがエジプトに援軍を求める。そんなことをしたってダメだということの中で言っているわけです。いちいち読みません。

6 視よなんじエジプトに依頼めり。これ傷める葦の杖によりたのめるがごとし。もし人これに倚よりもたれなばその手をつきさされん。エジプト王パロがすべて己によりたのむものに対するは斯のごとし。7 汝われらはわれらの神エホバに依頼めりと我にいわんか。そは曩さきにヒゼキヤが高きところと祭壇とをみな取り去りてユダとエルサレムとにむかい汝等ここなる一つの祭壇のまえにて拝すべしといえる夫それならずや。8 いま請うわが君アツスリヤ王に賭かけをせよ。われ汝に二千の馬を与うべければ汝よりこれに乗るものをいだせ。果して出しうべしや。

かなり侮辱をされているような文句もありますけれども。16 節、

16 ヒゼキヤに聴き従うなかれ。アツスリヤ王かくのたまえり、なんじらわれと親和よしみをなし出できたりて我にくだれ。

と。アツシリヤの王がかく言っているといつて、決定的な言葉を与えているわけです。18 節に、

18 おそらくはヒゼキヤなんじらに説きてエホバわれらを救うべしといわん。然どももろもろの国の神等かみたちのなかにその国をアツスリヤ王の手より救える者ありしや。

なかったではないかと。アツシリヤは天下無敵だと言って、誇っているわけです。だから、

20 これらの国のもろもろの神のなかに誰かその国をわが手よりすくいだしし者ありや。さればエホバも何いかでわが手よりエルサレムを救いだし得んと。

と傲然と言って、それで文句が終つてますが。

●ヒゼキヤの祈り

そうすると、37 章にいきまして、

1 ヒゼキヤ王これをききてその衣をさき鹿衣あらたえをまといてエホバの家にゆき、
2 家司いえつかさエリアキム書記セブナおよび祭司のなかの長老等としよりたちをして皆あらたえを
まとわせてアモツの子預言者イザヤのもとにゆかしむ。

悲しみや苦しみのときにこういう様相をするんです。

3 かれらイザヤにいいけるは、ヒゼキヤ如此かくいえり。今日は患難なやみと責せめと辱かしめの日なり。そは子うまれんとして之をうみいだすの力なし。



たとえばそういうようなわけだと。

4 なんじの神エホバあるいはラブシヤケがもろもろの言をききたまわん。彼はその君アツスリヤ王につかわされて活ける神をそしれり。なんじの神エホバその言をききて或はせめたもうならん。されば請うなんじこの遺れるものために祈^{いのり}禱をささげよと。

そうすると、

6 イザヤかれらに言いけるは、なんじらの君

というのはヒゼキヤです。

につげよ。エホバ斯^{かく}いたまえり曰く、アツスリヤ王のしもべら我をのしりけがせり。なんじらその聞きしことばによりて懼^{おそ}るるなかれ。7 視^みよわれかれが意^{こころ}をうごかすべければ、一つの風声^{ふうせき}をききておのが国にかえらん。

「二つの風声」というのは、エチオピアが攻めてくるといううわさなんです。

かれをその国にて剣にたおれしむべし。

ということをイザヤが言った。やはり、預言者らしい言葉です。それからまだありまして、

9 節、

9 このときエテオピアの王テルハカの事についてきけり云く、かれいでて汝とたたかうべしと。このことをききて使者をヒゼキヤに遣^{おこ}していう。10 なんじらユダの王ヒゼキヤにつげて如此いえ、なんじが頼める神なんじを欺^{あやむ}きてエルサレムはアツスリヤ王の手にわたされじというを聴くことなかれ。……14 ヒゼキヤつかいの手より書をうけて之を読^よめり。しかしてヒゼキヤ、エホバの宮にのぼりゆきエホバの前にこのふみを展^{ひら}ぶ。15 ヒゼキヤ、エホバに祈りていいけるは、

そのあとのヒゼキヤの祈りはなかなか大事な祈りです。

16 ケルビムの上に坐したもう万軍のエホバ、イスラエルの神よただ汝のみ地のうえなるよろずの国の神なり。なんじは天地^{あめつち}をつくりたまえり。17 エホバよ耳をかたむけて聴きたまえ。エホバよ目をひらきて視たまえ。セナケリブ使者^{つかい}して活ける神をそしらしめし言をことごとくききたまえ。18 エホバよ実にアツスリヤの王等^{くにとびと}はもろもろの国民とその地とをあらし毀^{こぼ}ち、19 かれらの神たちを火になげいれたり。これらのものは神にあらず。人の手の工^{わざ}にして、あるいは木あるいは石なり。斯るがゆえに滅ぼされたり。20 さればわれらの神エホバよ、今われらをアツスリヤ王の手より救い^{すく}いだして、地のもろもろの国にただ汝のみエホバなることを知らしめたまえ。

実存の神であることを知らしめたまえと祈っているわけです。

21 ここにアモツの子イザヤ人をつかわしてヒゼキヤにいわせけるは、イスラ



エルの神エホバかくいいたもう。汝はアツスリヤ王セナケリブのことにつき
て我にいのれり。²²エホバが彼のことにつきて語り給えるみことばは是なり。
いわくシオン^{おとめ}の処女はなんじを侮りなんじをあざけり、エルサレムの女子は^{おみなこ}
なんじの背後より頭をふれり。²³汝がそしりかつ罵れるものは誰ぞ。なんじ
が声をあげ目をたくく向けてさからいたるものはたれぞ。イスラエルの聖者
ならずや。

と言つて、イザヤがさらに注意をうながしているわけです。30 節に、

³⁰ヒゼキヤよ我がなんじにたもう徴はこれなり。なんじら今年は落穂より生
えたるものを食ひ、明年は糞生より出たるものを食はん。

前年の収穫の残りのことらしいです。

三年にあたりては種くことをなし收ることをなし、葡萄ぞのを作りてその果
を食うべし。

非常にいいことが約束されている。

³¹ユダの家ののがれて遣れる者はふたたび下は根をはり上は果を結ぶべし。

³²そは遣るものはエルサレムよりいで、脱るものはシオンの山よりいづる
なり。万軍のエホバの熱心これを成したもうべし。

希望をもつて、大丈夫だと。そこで、35 節、

³⁵我おのれの故によりて僕ダビデの故によりて、この城をまもり、この城を
すくわん。これエホバ宣給るなり。

これは決定的な、イザヤに告げられた神の聖言の、それを伝えた預言です。そうすると、
その通りになってしまった。

³⁶エホバの使者いできたりアツスリヤの陣営のなかにて十八万五千人をうち
ころせり。早晨におきいでて見ればみな死にてかばねとなれり。

これは列王記略にも出てます。一夜のうちに非常に不思議なことが起きた。それで彼らは
囲みを解いて退いてしまう。これが紀元前 701 年のことです。

●わが中保となりたまえ

38 章は、ヒゼキヤが病気で神さまに祈つた、そのまた祈りがずっと出ています。旧約で
は死のかなたの、その次の甦りのところまでは――時々、それは閃きが出てますけれども
――なかなか行つてない。このヒゼキヤの祈りもやはり死は突破してない。「生けるうちには」
というような言い方で書いている。しかし、切々たる祈りではありませんけれども。特に 10
節からずっとです。14 節、

¹⁴われは燕のごとく鶴のごとくに哀みなき鳩のごとくにうめき、わが眼はう
えを視ておとろう。エホバよわれは迫りくるしめらる。願くはわが中保とな



りたまえ。

という不思議な言葉がある。神さまに対して、私の中保なかだちとなってくださいと言う。これはやがてキリストが中保者となり給うんです。ヨブ記の中にも中保なかだちを祈っているところがありますが、あの祈りに似てます。

「あなたが中保なかだちとなってください。あなたご自身が執り成していただきたい」と。不思議な言葉です。17節、

17 視よわれに甚しき艱苦くるしみをあたえたまえるは我に平安やすきをえしめんがためなり。
汝わがたましひを愛して滅亡ほろびの穴をまぬかれしめ給えり。そはわが罪をことごとく背後うしろにすてたまえり。

非常に著しい言葉です。

「自分の罪は全部あなたがこれを後に棄ててください。私はただ前進あるのみだ」と。あとは陰府や墓や死のことが書いてありますが、それはまだ突破してはいませんけれども、非常に現実に神さまに本当に近づいて迫っている。そして、その恵みを本当に感謝している。

「わが罪をことごとく背後うしろにすてた」という、素晴らしい言い方です。

18 陰府よみはなんじに感謝せず、死はなんじを讃美せず、墓にくだる者はなんじの誠実まことをのぞまず、19 唯いけるもののみ活けるものこそ汝に感謝するなれ。
わが今日感謝するが如し。父はなんじの誠実まことをその子にしらしめん。

こういう、ユダヤ人の現実における切なる言葉というものがやがて永遠に、永遠の現実に展開していくわけです。だから、信仰の世界は、

「今日、今、ここに」

ということが非常に大事なので、それが本ものになると、永遠化していくわけです。

20 エホバ我を救いたまわん。われら世にあらんかぎりエホバのいえにて琴をひきわが歌をうたわん。

讃美しますという。あとまた、39章5節に、

5 イザヤ、ヒゼキヤにいう。なんじ万軍のエホバの言をきけ。6 みよ日きたらん。
なんじの家のものなんじの列祖おやたちが今日まで蓄たくわえたるものは皆バビロンにたずさえゆかれて遺るものもなかるべし。是はエホバのみことばなり。

という、恐ろしい預言がされている。結局は、この国は滅びると。エレミヤも預言していました。エレミヤ記20章に出ています。けれども、彼らは、国は滅びても、民は決して滅びない。そこがユダヤ人の、本当に信仰の民の強さですが。



●とうとき隅石

そういう背景のもとに――預言者の言葉も混じっていますが――我々が今、学ぶところの預言があるわけです。まあ、預言集というようなわけですが。そこで、もとへ戻ります。28章の14節、

14 なんじら此エルサレムにある民をおさむるところのあなどるもの輕慢者よ、エホバの言をきけ。15 なんじらは云えり、我ら死と契約をたて陰府とちぎりをむすべり。漲りあふるる禍害わざわいのすぐるときわれらに來らじ。そはわれら虚偽いつわりをもて避所あひかてころとなし欺詐あやむきをもて身をかくしたればなりと。

これはとてもこれを読んだだけではわからない。この者たちがこういうことを言うはずはないので、

「お前たちは誇つて言うけれども、実はそれは死や陰府や禍害や偽りや欺きと契約を結んでいることと同じことだよ」

ということをこの預言はこういう言葉で言いなおしているわけです。これはエジプトのことです。エジプトと契約を結んで、アッシリヤなんかに対したら、これはもう結局は滅びるぞ、ということの預言です。日本の現実を思うと、その思いなかばにするところがあります。本当に依り頼む神を持たないからね。

16 このゆえに神エホバかくいい給う、視われシオンに一つの石をすえてその基もととなせり。これは試こころみをへたる石とうとき隅石かたくすえたる石なり。

と、たたみかけて言っている。

この言葉は非常に著しい言葉で、まず詩篇の118篇22節にその言葉が引用されている。新約聖書にはマタイ伝21章42節、使徒行伝4章11節、ロマ書9章33節、10章11節。ペテロ前書2章6節から8節――ここは非常に似ている――それから、エペソ書2章20節。それほどこまでに、この言葉が重んぜられて引用されている。もちろん、新約では、この石は――「千歳ちとせの岩」と讚美歌にあるように――キリストのことです。イスラエルには凄い石がありますから、この依り頼む姿を思うわけです。

これに依り頼よりたのむものはあわつることなし。

「これを信ずる者はあわつることなし」

と。この「信ずる」という字は「アーメンとする」という字です。「これを信ずる」は「これをアーメンとする」

ということ。この「アーメン」という言葉は、「信ずる」ことも、さっきの「信賴する」「依り頼む」も――言葉はちよつと違いますけれども――みんな同じです。中味からいうと同じことになる。要するに、信仰が觀念でない。どこまでも具体的にその力にあずかるわけです。



●回帰信仰

それから、イザヤ書にいつも出てくる言葉は、

17 われ公平を準繩とし正義を錘とす。
はかりなわ おもし

と。

「公平と正義」

「ミシュパートとツエデカー」

という言葉がしょっちゅう出てくる。「公平」という字は「正しく審く」という意味です。「正義」はむしろ「義」と言ってもいいくらいだ。「義と愛」という、あの「義」という字がこの「正義」と訳される。

神さまの審判のかけには必ず恵みがあります。神さまは、滅ぼすために審判するのではない。だから、しょっちゅう預言者が

「立ち帰れ」

と言う。立ち帰れば恵みがある。神さまは、立ち帰るのを待っているんだ。そうすれば、恵みがある。

私は『無の神学』（小池辰雄著作集第三巻 1982年刊）にも書きましたが、この

「シユープ」

「帰り行く、帰入する」

これはどの預言者にも共通している大事な言葉です。神のもとに帰る。だから、私の信仰は、「回帰信仰」

と言ってもいいくらいです。回り帰る。めぐ

「クリスチャンの生涯は結局、回帰である。キリストがそう言われた」

と、ルターが言った。今度出る、ルターの本（小池辰雄著作集第七巻『聖書の人ルター』1984年刊）にあの有名な「九十五箇条」も書きましたから、よく読んでください。

20節に、

20 その状は床みじかくして身をのぶることあたわず。衾せまくして身をおお
さま したて ふすま
うこと能わざるが如し。

という面白い表現で出ている。なかなか、預言者は詩人ですからね。これは、エジプトに依り頼んだって、それと同じようなさまだと。歴史的にはこういった国際関係の現象はいろいろ出てます。現に今でもあります。日本でも偉大な政治家が出てこないダメだ。また結局は、我々一人ひとりの問題ですけれども。

21 そはエホバ往昔ペラヂムの山にて起ちたまひしがごとくにたち、ギベオンの谷にて忿恚をはなちたまひしが如くにいきどおり、而してその所為をおこない給わん。奇しき所為なり。その工を成したまわん。異なる工なり。
むかし おこなひ おこない

ここに、「異なる工」という言葉がでます。神さまの「異なる工」というのは審判のこと



です。

23節からあとは農夫のいろいろな穀物を扱うことが書いてある。それにはどのようなにやるのか、どういう道具を使うのか、小麦や大麦や粗麦はだかむぎや馬芹まきんの種とか、いろいろなことが書いてある。神さまのなさり方は、それぞれに対してそれぞれのやり方がおありになるんだということ。29節に、

29 此もまた万軍のエホバよりいづ。その謀略はかりごとはくすしくその智慧はすぐれたり。

と書いてあるのがそのことです。いろんな民族、部族を神さまは取り扱う。それはそういったような、それぞれの扱い方があるんだ、決して同じようなことをなさるのではないんだ、ということですよ。

● 禍害なるかな

それからその次、29章にいきます。

1 (禍害わざわいなるかな) ああアリエルよアリエルよ、ああダビデの営をかまえたる邑まちよ、

「アリエル」というのは、神の祭壇の炉のことをいう。小羊や牛を屠るときに炉です。この場合はエルサレムのことです。「禍害わざわいなるかなエルサレムよ」ということ。

この預言の中に

「禍害わざわいなるかな」

という言葉が時々出てくる。ヘブライ語では、

「ホーイ」

という。「禍害わざわいなるかな」で始まっているのが、28章1節、29章1節と15節、30章1節、31章1節、33章1節。その6回出てきます。これを「禍害わざわいなるかな預言集」なんてなことを言う人もあるくらいです。

それで、神さまの審判のことが、地震や暴風やいろんなことがずっとここに書いてあります。6節、

6 万軍のエホバはいかづち、地震、おおごえ、暴風はやち、つむじかぜ及びやきつくす火の焰ほのおをもて臨みたまおうべし。

これはみんな審判の表れ方です。

その次、9節から。10節に、

「酣睡うまいの霊」

ということが書いてある。これは「熟睡」という字です。深く眠ること。魂がすっかり眠ってしまったてどうにもならない。それが「酣睡うまいの霊」。観念的なキリスト教にはどうも「酣睡うまいの霊」がだいぶ働いているかなんか知りませんが、聖霊を受けると、この「酣睡うまいの霊」



でなくなるでしょう。

9 なんじらためらえ而しておどろかん。なんじら放肆^{ほし}にせよ而して目くらまん。かれらは酔えりされど酒のゆえにあらず。かれらはよろめけりされど濃酒^{こきざけ}のゆえにあらず。10 そはエホバ酣睡^{うまい}の霊をなんじらの上にそそぎ、而してなんじらの目をとじ、

霊眼^{れいがん}がとじた。

なんじらの面^{かお}をおおいたまえり。その目は預言者そのかおは先知者^{せんちしや}なり。11 かかるが故にすべての黙示はなんじらには封じたる書^{ふみ}のことばのごとくなり。文字しれる人にわたして請うこれを読めといわんに、答えて封じたるがゆえによむこと能わずといわん。12 また文字しらぬ人にわたして請うこれをよめといわんに、こたえて文字しらざるなりといわん。

どつちみちダメだと。

「論語読みの論語知らず」

という言葉がありますが、

「聖書読みの聖書知らず」

がだいぶあるわけです。私もながいこと、無教会にいたときはそうだった。それは一応はわかっていましたよ、一応はわかつてたし、結構なんだけれども、しかし、なにか足りない。聖霊が臨んできてからはベールがとれた。そして、封じたる封印が解かれた。これは本当にそうなんです。ですから、今は大体一般に、聖書研究をしても文字面だけでもって、実はその奥の封印は解かれていない。そういうようなことを暗示しているような言葉です。

13 主いい給わく、この民は口をもて我にちかづき口唇^{くちびる}をもてわれを敬^{かしこ}えども、その心はわれに遠ざかれり。そのわれを畏^{かしこ}みおそるるは人の誠命^{いましめ}によりておしえられしのみ。14 この故にわれこの民のなかにて再びくすしき事^{わざ}をおこなわん。そのわざは奇^くしくしていとあやし。かれらの中なる智者のちえはうせ聡明者^{さいめいもの}のさときはかくれん。

15 己^{みづか}がばかりごとをエホバに深くかくきんとする者はわざわいなるかな。暗中^{くらやみうち}にありて事をおこないていう、誰かわれを見んや、たれか我をしらんやと。16 なんじらは曲れり。いかで陶工^{すえものづくり}をみて土塊^{つちくれ}のごとくおもう可^べんや。造られし者おのれを作れるものをさして我をつくれるにあらずというをえんや。形づくられたる器はかたちづくりし者をさして智慧なしというを得んや。

エレミヤが似たようなことを言ってますが。神さまに向かって何を言うかと。

●終末の救いの音信

そうかと思うと今度は、がらりと変わりました、17節からは非常に終末の救いの音信が



出てきます。

17 暫くしてレバノン^{しほら}はかわりて良田^{よきはた}となり、良田は林のごとく見ゆるとききたるならずや。 18 その日

「その日」とか、「かの日」とか、「末の日」とか、みんな歴史の終末の日のことです。

聾者^{のみみしい}はこの書のことばをきき、

その時は聞こえてくる、聾者が。

盲者^{めしい}の目はくらきより闇よりみることを得べし。

素晴らしいですね。目があかなくても見えてくるという。霊眼で見えてくる。19 節はまた大事なところですよ。

19 謙^{へりく}だるものはエホバによりて

「エホバによりて」は「エホバに在って」です。まさに「エン・クリスト」と同じこと。

その歡喜^{よろこび}をまし、人のなかの貧しきものはイスラエルの聖者によりて快樂^{たのしみ}をうべし。

聖者に在って快樂をうべしと。

「貧しき人、へりくだる者」

という、こういう言葉はもうキリストが山上の大告白で仰っているとおりです。こういう旧約の句からやつてくる。とにかく、傲慢^{あなごころもの}なのはサタンの味方だ。

20 暴^{あらぶ}るものはたえ、侮慢^{あなどるもの}者はうせ、邪曲^{よこしま}の機^{おり}をうかがう者はことごとく断滅^{たちほろぼ}さるべければなり。 21 かれらは訟^{うったえ}をきく時^{むな}まげて人をつみし、邑門^{まちのもん}にていさむるものを謀略^{はかりごと}におとしいれ、虚^{ことば}しき語をかまえて義人をしりぞく。

十字架の二人の盗賊のうち片一方の盗賊は、

「私はさんざん悪いことをしました。しかし、どうぞ、覚えてください」

と、こころ砕けて言ったら、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と、キリストが言われた。これがへりくだりの魂です。もう一方の盗賊は、

「あんたは神の子なら、我々を救ったらいいいじゃないか」

なんて傲慢に言ったら、これは地獄へ行く。これが人類を二つに分ける魂の姿ですね。それがやっぱり 19 節に出ているわけです。地獄行きか、天国行きかはそれで決まる。人間の相対的な実存がどうのこうのと、そんな問題じゃない。

22 この故にむかしアブラハムを贖^かいたまいしエホバはヤコブの家につきて如此^{かく}いいたもう。ヤコブは今より恥をかうむらず、その面^{かお}はいまより色をうしなわず。

「贖^かう」という言葉は、

「困難や艱難から救い出す」



という意味と、

「罪を許してそれから解放する」

という二つの意味を持つている。だから、出エジプトも、出バビロニヤも――バビロニヤ捕囚はイスラエルの不信の罪を問われて、神さまの審判を受けたわけです。アッシリヤの王様あたりも、その手先になっているんだと自分でも言っているくらいですから――両方ともこの「贖う」という言葉を使います。しかし、我々が「贖う」という言葉を使うときには、正に「贖罪」の方です。キリストによって我々が自己中心の罪から贖われている。これが案外、はつきりしてないのがありまして困るんですが、その点はぜひはつきりしていただきたい。そういう二通りの使い方がありますので。

この「アブラハムを贖い」というのは、艱難から救い出した方です。

²³かれの子孫はその中にわがおこなう手のわざをみん。その時わが名を聖としヤコブの聖者を聖としてイスラエルの神をおそるべし。²⁴心あやまれるものも知識をえ、つぶやけるものも教誨をまなばん。

神の名を聖とする。イザヤ書 6 章に出てくる、「聖なるかな、聖なるかな」です。

●信ぜずば立つことを得じ

今度は 30 章です。ここにも、

「エホバのたまわく、悖れる子輩はわざわいなるかな。

云々と。預言者の言葉というものはいろいろ波状的にきます。別に論理的な構造じゃないですから。これもエジプトの協定がけしからんと。

「エジプトの陰によるのはかえって汝らの辱めとなるぞ」

なんていうことが 3 節にも出てますが、しきりにそのことが言われているわけです。イザヤが、「ダメだよ、エジプトでは」と。9 節に、

⁹これは悖れる民いつわりをいう子輩、エホバの律法をきくことをせざる子輩なり。……¹⁴主これを破りあだかも陶工の瓶をくだきやぶるがごとくして惜しみたまわず、その碎けのなかに爐より火をとり池より水をくむほどの一片だに見出すことなからん。

と。それくらいに徹底的にやつつけられると。

¹⁵主エホバ、イスラエルの聖者かくいたまえり。なんじら立ちかえりて静かにせば救をえ、平穩にして依り頼まば力をうべしと。

これはマルチン・ルターの愛誦の句です。「依り頼む」はドイツ語でいうと、「フエアトラウエン」、信頼するということ。信仰は信頼だという。

この「依り頼む」「信頼」というのは、7 章 9 節に似たようながある。3 節から、
「³その時エホバ、イザヤに言いたまいけるは、今なんじと汝の子シヤルヤシ



ユブと共に

「シャルヤシユブ」というのは「遺れる者帰り来らん」という意味です。

いでて布をさらす野の大路のかたわらなる上池かみのいけの樋口にゆきてアハズを迎え、

これは貯水池です。

4 これに告ぐべし、なんじ慎みて静かなれ、アラムのレヂン及びレマリヤの子はげしく怒るとも二つの燼余もえのこりたる煙れる片柴はしばのごとし。懼るるなかれ、そんな連合軍は恐れることはない。

心をよわくするなかれ。

静かに慎みてあれと。そして、9 節に、

9 またエフライムの首はサマリヤ、サマリヤの首はレマリヤの子なり。若しもなんじら信ぜずばかならず立つことを得じと。」(イザヤ 7:3-9)

「若しもなんじら信ぜずばかならず立つことを得じ」

という言葉です。もし神さまに信頼しなかったら立つことができないぞと。「立つ」というのは存立する、持続するという意味です。ヘブライ語では、この「信頼する」という「信ずる」という語と「立つ」という語が同じ言葉を使っている。信じないと、どこまでも保てないぞと。「持続する」とことと「信ずる」とことが同じなんだ。これは非常におもしろい。私はこれを見て本当はびつくりした。

「信頼すれば必ず大丈夫だ」

と。ということは、その大丈夫というのは上からくるわけです、上からの力が。だから、立ち帰ることです。

●絶対恩寵の一如の現実

申し上げてとおり、「立ち帰る」は、私が言いたいのはむしろ、

「帰入」

と言いたい。帰り入る。

「信入」

信じ入る。信じることも「入」でなくてはダメなんだ。信入しなくては。祈ることも、

「祈入」

しなければダメだ。みんな入っていかなければダメ。そして、キリストと一つにならないかぎりには、本当の現実には入らない。これは私は死に至るまで言います。もう絶対にそうですから。離れていたり、まだ外接円くらいではダメなんで、その中に本当に、

「われキリストのうちに」

ということではなくては。「エン・クリスト」「キリストの中に」というのは空念仏ではない



ですから。パウロが本当にそういう現実にしたから、彼はもの凄いいことになった。ヨハネだってそうですよ。一つになる。キリスト自身が全くそうでしょ。

「われと父とは一つなり」

と。一般のプロテスタントはそういった一如の神秘の世界を、

「われが汝か、汝がわれか」

というような現実を、信仰の世界で本当に受けとっていないから。

私は人にどう思われてもいい。この現実には、私は賜りたる現実だから、仕方がない。そういう絶対恩寵の一如の現実です。だから、自然にこういう言葉が出てくる。「帰入」だとか、「祈入」だとか、「信入」だとか。こんな熟語は普通ないでしょう。私たちはそのような、祈り入ると、もう本当に

「われもなく、世もなく、ただ汝のみあり」

というような世界です。それもただ客観的に在るのではないですよ。一つになっているから。禅宗の世界でそういう無という、そういった境地を禅宗では求めている。ありがたいことに私たちはキリストの十字架で、そこに入れるんだから。自分がすっ飛ばされているんだから、十字架で。人に何と言われようが、そんなことはもう問題じゃない。私ははつきり、この十字架ですっ飛んでいるんだから。無いんですよ、私は本当に。だから、本当に聖霊が来て、キリストの中に入れる。これは絶対恩寵ですから。悟りでも何でもありません。

そういう意味で、「深く静かに」というのは、深く祈り入ることです。大きな声で叫んだって何だっていいですよ、祈り方は。とにかく、その中に深く入ること。実は向こうから入ろうとしていらつしやるんです。捕まえようとしている。包もうとしているわけです。

そうでしょうが、そこに小さい赤ちゃんがいるけれど、みんなお母さんに抱かれています。そのようにして私たちはキリストの中に入れられている。懐の中に。

「神の御懐にいた独り子」

とヨハネ伝にもあるじゃないですか。

「立ち帰れ」というのはヘブライ語では、「帰りにおいて」という名詞的な言い方で、「帰っているという事態において、そして静かにずっと落ち着いていれば、必ず救いを得る」

と。それがもう既に救いの世界に入っているから、救いを得る。これも二段構えでない。静かに入っていれば、もうそこが救いの世界。静かにして自分を投げかけて入れているのがこの「信頼」です。藤井先生もよく

「信頼」

ということを仰いました。けれども、それが何かまだこちら側からの角度がつよい。先生を私は批判するんじゃない。先生は本当に素晴らしい実存でしたから。けれども、この信頼が本当に中に入っている信頼だと、そうすると力がくる。なぜ、力がくるんですか。中



に入るからです。もう読んでいて、グーッとその力がきたら、本当に読んでいることになりますから。

● 俟ち望むものは福いなり

このイザヤ書30章15節というのは、そういう意味で忘れられない。さっき言った、7章4節、9節。それから、ミカ書3章にも多分あつたはずです。ちよつと別な言葉だけれども、8節に素晴らしい言葉があるね。

「8 然れども我はエホバの御霊によりて能力身に満ち、公義および勇氣衷に満ちれば、ヤコブにその愆^{とが}を示し、イスラエルにその罪を示すことを得」(ミカ3:8)

「御霊によりて」ではなく、

「エホバの御霊にありて能力身に満ち、公義および勇氣うちに満ちれば」です。特にここは「エホバの霊」のことが出ている。

15 ……然どなんじらこの事をこのまざりき。

だけれども、そのようにしなかつたではないか、ダメだねと。

16 なんじら反ていえり、否われら馬にのりて逃げ走らんと。この故になんじら逃げ走らん。又いえり、われら疾きものに乘らんと。

ダメだ、そんなことをしたつて、アツシリヤはもつと速いぞと。

この故になんじらを追うもの疾かるべし。17 ひとり叱咤すれば千人にげはしり、五人しつたすればなんじら逃げ走りて、その遺るものは僅かに山嶺にある杆のごとく、岡のうえにある旗のごとくならん。

それくらいアツシリヤというのは強いからダメだよ、とイザヤが言っている。それから、

18 エホバこれにより俟ちてのち恩恵を汝等にほどこし、これにより上りてのちなんじらを憐れみたまわん。エホバは公平の神にまします。凡てこれを俟ち望むものは福いなり。

この「俟ち望む」も同じ字です、信賴すること。「禍害」に対して、ここは「福い」という言葉が出てくるわけです。

19 シオンにおりエルサレムにおる民よ、なんじは再びなくことあらじ。そのよばわる声に應じて必ずなんじに恵みをほどこしたまわん。主ききたもうとき直ちにこたえたもうべし。

主は呼ばわれれば、必ず直ちに聞いてくださると。

20 主はなんじらになやみの糧とくるしみの水とをあたえ給わん。

これは、「悩みのときに糧を、苦しみのときに水を」ということなんです。

なんじを教うるもの再びかくれじ。汝の目はその教うるものを



というのはエホバのことですよ。神さまを、

恒^{つね}にみるべし。

● 右にゆくも左にゆくも

その次がおもしろい言葉です。

²¹なんじ右にゆくも左にゆくもその耳にこれは道なりこれを歩むべしと後^{うしろ}辺^へにてかたるをきかん。

これは不思議な句です。「右にゆくも左にゆくも」と、まさにそう書いてある。「右か左か」ではない。

「右に行こうが、左に行こうが、これが道だということになる」

と。どういうことですかね、これは。私はこの句を冥想しました。

「右に行つても左に行つてもいいよと、後から神さまの声がする」

という。人間は大体、迷う。岐路にくると、右に行こうか左に行こうかと。

「右か、左か」

といって判断しているのは、判断の世界です。

判断の世界を――それは悪くはないけれど――それをもうひとつ超えた世界に入らないと、信仰の世界は。それはどうということかというのと、

「右でもない、左でもない」

という段階に入らないとね。

「右に行つても左に行つてもいい」

とエホバが仰るのは――どつちもいいことは現実にとだけあるか知りませんが――
――両方プラスして仰っているのに、今度は両方マイナスで、「どつちでもない」という判断に私はきた。

「どつちでもない」

ということはどういうことかというのと、

「お前自身が道となれ」

ということ。「私は道だ」とキリストは言われたでしょ、

「我は道なり」

と。キリストという道の中に入ると、右へ行こうが左へ行こうがどつちでもいい。だから、

「どつちでもない」

と私は言っただけです。

「右もよし、左もよし」

ということと、

「右でもない、左でもない」



ということは同じことなんです。ということは、もうひとつ上の次元にいくと、

「お前自身が道であれ」

ということ。キリストは、

「お前自身が道なら、私は道だから、お前はその示される所に行けば、それが右で

あろうが左であろうが構わない」

と。しかし、そうでなかったらば、いわゆる道に頼っていたら、対象的な道に頼っていたら、迷うよと。良さそうだが必ずいつか迷う。けれども、自分自身が道になれば、キリストの道になれば、キリストと同じ道になれば、迷わない。まあそんな註解はどこにもありませんよ。そういう、

「汝自身、道となれ」

ということ。

「私は後から、お前が道になれということを言っているんだよ」

と。そういうように私には響いてきました。それで、この不思議な言葉がはたときた。

もういいんです、人にどう誤解されようが、どう批判されようが、一向差し支えない。ゲーテが、

「人の間というものは、よく誤解がもとになっておかしくなる」

と言ってます。そういうことではないと、もうひとつ超えろと。いわゆる相対的判断の道から、もうひとつ超判断のところにないと。

「神さまは太陽を善きものにも悪しきものにも照らし、雨を正しきものにも正しからざるものにも降らしているではないか。お前はそのごとくあれ」

と言う。みんなその境地です。もうひとつ超えた境地。超差別です――無差別ではない――超差別の世界です。超差別の世界に入ると、我々自身が道となり、生命となり、光となる。何といってもその現実です。一如の現実。これは絶対恩寵の賜りたる現実です。自分がそうだったのではない。そういう事態が

「無の実存」

というんです。

「自分がなにか悟って無となった」

なんていうのでは絶対にありませんから。

●至道無難禪師

さすがにやはり、日本には偉い坊さんがいる。至道無難禪師(1603～1676)という。道が極まった世界に入ると、それは難く無い。やさしい。至道無難。あるいはもう艱難がない。超越してしまっている。これは正受老人の先生です。そのまた弟子が白隠。白隠にとつてはこの至道無難禪師というのは大先生だ。そういう人たちの言葉がこの福音の光で見え



てくるからありがたいわけです。

「善悪邪正よりつかぬは、釈迦の法なり」

と。善悪、正邪、そんな相対的な判断をもうひとつ乗り越えた世界がお釈迦さんの法だよという。これは無法の法であり、妙法であり、秘法であり、靈法であるという。これはみんな同じことです、無法と言おうが、秘法と言おうが、靈法と言おうが。そういう世界は、そういった相対的な判断をもうひとつ超えた世界。ただ、不法はいけませんよ、これはい

かん。

これは無難禪師の『即心記』の中に書いてある言葉です。

「ぐくらの玉のうてなはほかになし。いきながら身のなきをしるべし」

極楽の玉の台は他^{うてな}にない。生きながら自分の身を身とも思わない。無身になる。

「わが法は柳の糸の乱れ髪、結ふに結はれず解くに解かれず」

私の法は柳の糸の乱れ髪であって、言うに言われず説くに説かれずと。言うことも説くこともできないと、おもしろい言い方をしている。もうそういう境地となると、概念的な説明の世界を超えているということです。

「道という言葉にまよふ事なかれ、朝夕おのがなすわざとしれ」

さすがにやはり、無難禪師だ。それだけのわざをやつていれば大したものです。そうしたら、道なんて言わなくても、それ自身が道となつて、それが本当の無道の道の世界だと。これもおもしろいよ、

「無というもあた^{いしば}ら詞のさはりかな、むともおもはぬときこそむとなる」

と。正にそうだね。あまり、無なんて言つてこだわったら、また無にとらわれてしまつてダメだよと。いわゆる意識してたらダメだ。無意識の世界。

キリストは、右にいる者たちに、

「お前は、私が喉が渴いたときに水をくれたではないか」と。

「いつやりましたか」

なんて言つて答えると、

「それが本当のあり方だよ。天界にいく人たちはそういうあり方なんだ」

と、キリストが言われた。あれと同じです。

これもおもしろいよ、これも全くそのとおりだね。

「釈迦にしゃかなし、法なし、教なし、ならいなし」

と。「釈迦にしゃかなし」というのは素晴らしい言葉だ。お釈迦さんにお釈迦さんはないよという。お釈迦さんも自分は釈迦だなんて思つてない。「釈迦にしゃかなし」と。キリストもキリストと思つてない。我を何ものとも思つてないんだ、キリストは。だから、無者でしょ。「法なし」と。法もない。無法だ、無教だ、無習だという。私は楽しいね、こういう言葉を聞くと。だから、お釈迦さんも正に無者だということ。キリストも無者です。



こういう、私が言っているのを、今の神学者たちも教会も無教会も、私をみんな、「あれはちよつとおかしい」

と言う。いいよ、おかしくて。結構ですよ。この一流の坊さんたちや、パウロやなにかが「そうだつ」と言ってくればもうたくさんだ。

そういう、キリストの絶対恩寵の世界は、こういう言葉が本当に楽しく読めるようになってしまふ。そうでしょ。まだ凄い言葉があるよ。

「道を修する人、千万人に一人も、道を知る人ありとも、わがものにする人なし。」
知つてたつてダメだと。本当に自分のものに身につけなくては。

「わが物にする人あれども、それをすつる人なし。」

と。「わがものになった」と言つて、「自分のものだ」なんて思つたら、とんでもない。「それをすつる人なし」と。それを棄ててかかる。もうそういう境地は、言葉では言えない。それが本当の世界だと。さすがにね。私たちは、キリストの恩寵の世界に入つて、こういう凄惨な禅宗の、超一級の言葉がしみこんでくるから、ありがたくて不思議でしょうがない。これも素晴らしいね、これは歌だ。

「身の破れ果てたときの心こそ直に万法一如なりけれ」

私はよく「破れ」ということを言いますが。さつき言つた「身も棄てる」という、「身の破れ果てた」と、もうそんなものは全然問題にしないで、八方破れで、八方破れの心こそ直ちに万法一如であると。キリストの中に入ると、そういうことになる。『無の神学』の中にも「万法一如」ということを書いたでしょ。

このごろ、こんなものを私は読んでね、

「へえー、同じようなことを言つてくださっているなあ」

と思つて、驚きありがたがつていけるわけですけれども。自然に福音の世界でそういうことを示されていたわけですよ。もう、皆さん、何を読んでも楽しいですよ。このキリストの光で見えてきますから。

これがさつきの、「これは道なり」ということ。

「お前は道だ。右でもいい、左でもいいから行つてみる。お前が道なら大丈夫だぞ」

と。そういうことです。それは、私たちはキリストという道の中に入つてしまふと、そういうことにされるわけです。それはさつきから申し上げておき、本当に十字架されていると聖霊がくるから、この御霊の道です。それで、イザヤ書の30章21節が本当に福音的に生きてきた。

あとは祈ることにしましょう。それで一応、お終いにします。

